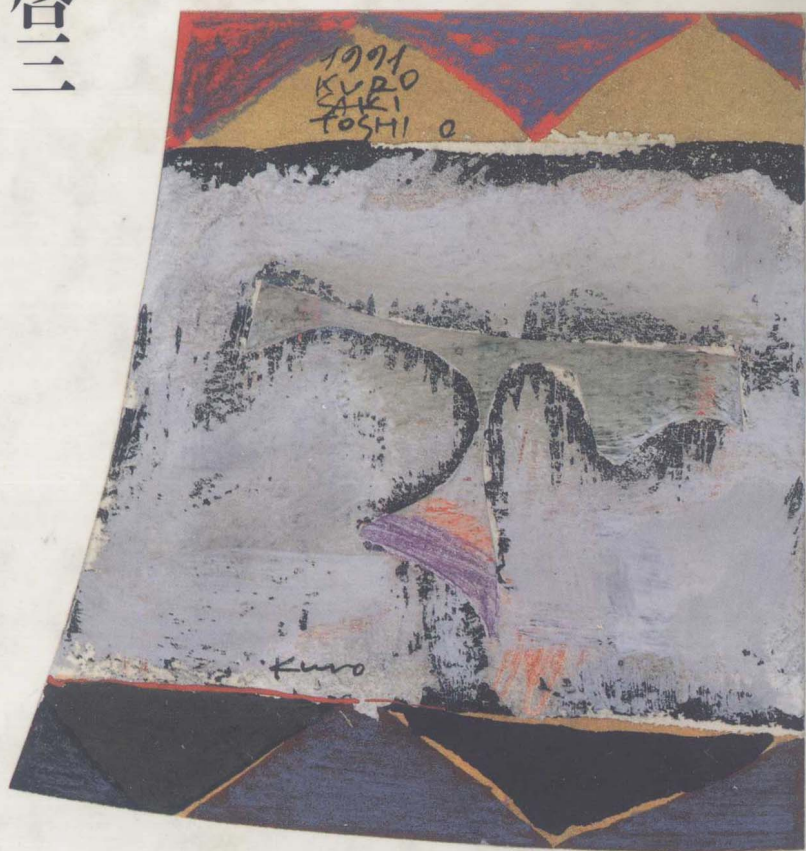


断崖の年

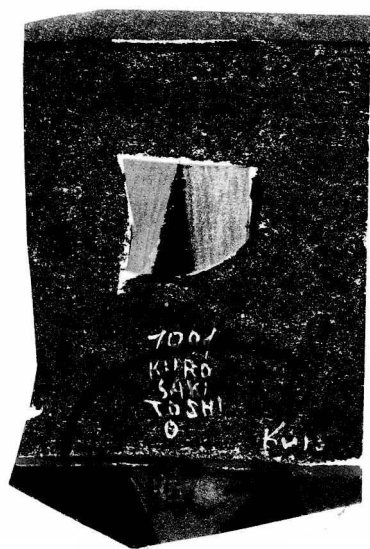
日野啓三



中央公論社

断崖の年

日野啓三



中央公論社

断崖の年

一九九二年一月二五月初版印刷
一九九二年二月七月初版発行

著 者 日 野 啓 三

発行者 嶋 中 鵬 二

印刷所 三 晃 印 刷

製本所 矢 嶋 製 本

発行所 中 央 公 論 社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替 東京二二三四

©1991 CHUOKORON-SHA, INC.
Printed in Japan

ISBN4-12-002084-3

目次

東京タワーが救いだつた

5

牧師館

69

屋上の影たち

95

断崖の白い掌の群

123

雲海の裂け目

151

あとがき

179

装画 黒崎 俊雄
装帧 中島 かほる

断崖の年

東京タワーが救いだった

アフリカがきつかけだった。

春の終るころ、急にアフリカに行きたいと、ほとんど発作的に思い出した。もともと私はアフリカにとくに興味を持ってきたわけではないし、動物好きでもない。東京が年毎に空気が悪くなつて息苦しくなるにつれて、ケニアあたりの広漠たるサバンナに立つてみたい、というようなことを漠然と考え出した気がする。

いやもつとあいまいで、もつと妖しい呼び声を聞いた気もする。ある信頼できる人類学の書物で、ピテカントロプス・エレクトাসやネアンデルタール人やクロマニヨン人のような人類の新しい進化種のすべてが、アフリカで進化しては次々に紅海を越えてユーラシア大陸各地にひろがって行ったようだ、という説を知った。それまでは、直立歩行して石器を製作した人類の祖先たちは東アフリカの大地溝帯で誕生したが、

その後の進化は各地で——たとえば北京原人は黃河流域で、ジャワ原人は南アジアで、ネアンデルタール人はヨーロッパで、それぞれ独立に進化したように思っていた。

また同じころ、現在のわれわれ人類の細胞内小器官のひとつミトコンドリアの遺伝子を辿ってゆくと、約二十万年前にアフリカに棲んでいた比較的小グループの人類の一女性に行きつく、という説を知った（ミトコンドリアの遺伝子は母系からのみくる）。それに対応するように、約二十万年前に人類の大腦新皮質が二百cc程度だが、比較的短期間に増大した証拠があり、われわれの言語体系の基本がそのアフリカの小グループで進化して広まったらしいという話を讀んだ。

アフリカというのは凄いとこなんだな、進化力というか創造力というか、そういう人類の質的な原基のようなものが、あの大陸にこもっているのではあるまいか、と強烈に感じたのだった。

そういう予感というか暗示に感応すると、私は忽ち軽率に動き出す。アフリカ行きが一番安い飛行機便を探し、予防注射も受けた。そして数年前に胆石ができかかっていると健康診断で言われたことを思い出し、軽い気持で、胆石が大きくなっていないか、かかりつけの読売診療所でエコー（超音波診断装置）で調べてもらった。

胆石は問題になるほど大きくはなっていなかった。ところが後の方にヘンなものも写っている、と検査技師が言った。写真が直ちに診療所長にまわされ、所長は真剣な顔で「これは良くない」とうめいた。写真はさらに泌尿器科の専門医師の手に渡った。右の腎臓がほぼ倍近く膨らんでいた。

「腫瘍だ」と医師は断言した。「どういう性質のものかはもっと精密に検査する必要があるが」

医師の言葉が何を意味しているか、漠然とは私にもわかった。だがかつて腎臓を患ったことは一度もないし、血尿が出たこともなければ、腎臓のあたりに痛みを覚えたこともない。自覚症状は何もないのである（一年ほど前から体全体が疲れ易くなっていたが、それは年齢のせいだと思っていた）。

こうしてアフリカのふしぎな力への憧れが、私自身の腹腔内の奇態な影を呼び出したのだった。私自身の細胞の一部の奇怪な増殖力を。

読売診療所の泌尿器科の医師は、代々木にある、さる大学病院の分院から来ていた。その後の精密検査は、代々木の分院の方で行われた。再度のエコー撮影、CTスキャ

ン撮影、血液採取など。これらの検査は身体的苦痛はなく、比較的簡単だった。

そのためについて腿の付け根の動脈から造影剤を注入する血管造影法の検査にも軽い気持ちで出かけて行った。検査後一晩病院で休んでもらうことになる、と予め言われていたのに。軽い麻酔薬を打たれ、下腹部の毛をそられてから、中央手術室で約一時間を要する大検査だった。妙な麻酔だった。視野全体が夕暮のように黄色く薄暗い。看護婦と検査技師が傍にいることはわかり、声も聞こえるのだが、顔が見えない。薄暗い視野の中で、手術室の壁の時計の針だけは実によくわかった。身体的な痛みはほとんど感じない。血管から造影剤を強く吹きこまれる時は、かなり強い熱さを腹の内面で感じたけれど。

ふしぎだったのは、視覚的な意識はあいまいなのに、息を吸って、止めて、というマイクを通しての音声指示は実に明瞭に聞こえ、その指示通りに従うのである。どんな指示でも音声命令通りに自動人形のように従ってしまうのではないか、と考えたりもした。

本当の苦痛は、むしろ検査が終って大部屋の隅に運びこまれてから始まった。何しろ動脈に穴をあけたのだから、絶対に動かしはいけない、と重い砂袋を二個、右脚

にのせられ、ひたすら仰臥の姿勢である。手術室から大部屋に戻ってきたのは午後三時頃だったと思う。午後七時頃まではまだ検査時の半麻酔状態が続いていて意識があまりいまいだったが、午後八時頃から意識が急速に冴えてきた。冴えてきたというよりストレスで緊張してきたというべきだろう。

ベッドは六人部屋の廊下側の隅。カーテンで部屋の他の部分から仕切られている。そして砂袋を脚にのせた不動状態だ。閉所に幽閉されている、という感覚に強烈に襲われた。強制されたわけではなく、みずからの意志で受けた正常な検査のあとなのだ、と意識的には納得しているはずなのに、閉所恐怖症的感觉がじわじわと滲み出てきて、頭の中は後向きの想念だけが加速する。

ベッドには足の方に小型テレビが取りつけてあって、百円硬貨を入れると映るようになっていて。看護婦に頼んで硬貨を入れてもらうと、ちょうどプロ野球の巨人戦を中継していた。日頃なら喜んで見るはずの巨人戦が、ところが全く頭に入らないのだ。眼前一メートル余の距離で映っている映像が、何だか何百メートルも彼方の、自分とは全く無関係の映像の勝手な流れとしか感じられない。

このテレビとの急な疎遠な関係、率直に言うテレビ（ビデオ映画も含めて）に全

く現実感を失ってゆく事態は、このあと入院、手術後に強く頭在化したのだが、このときはひたすら自分の神経が平常さを失っているせいと思った。眼前のテレビ画面が何を映しているかが、頭は勝手に暗いことばかり考え続けている。たとえば、今の苦痛は明朝まで我慢すれば一応解放ということになるはずだが、検査の結果はきっと手術必至ということになり、その手術を耐えたとしても元の状態に完全復帰するのではなく、何年か後にはまた体内のどこかの細胞の悪性腫瘍化あるいは動脈の硬化のような事態が必ず起こり、そうして次々と苦痛を耐えながら確実に死に近づいてゆくだけだ……。

そんな当り前の想念が、一般論としてではなく、自分自身の現在およびそれに直結する未来の必然として、実になまなましくリアルに厳然と頭の芯にくいこんでくる。文芸評論家および作家としてすでに何十年も、生と死の問題はいわば専門領域として、読み考え語り書いてきたはずなのに、いまだ何という動揺ぶりだ、とひたすら自分が恥かしくなる。

より正確にはこう言った方がいいだろう——面前に急に大きく姿を現した死がこわいのではなく、死はすでに視界の中に入ってきているのに次々とこんな身体的、神経

的苦痛を受け続けることが何とも無意味なことではないだろうか、という実感の耐え難さである。そんな呟きのような言葉が絶え間なく頭の内側から滲み出し続けるのである。そしてその呟きを、自分で止めることができない。

看護婦を呼んで、強い鎮静剤を注射してくれと頼んだ。日頃から睡眠薬をよく使用する私は、普通の睡眠薬ではきかないから、と。だが、皆さんこれでよくおやすみになりますよ、と若い看護婦は丸薬の睡眠薬を一個渡してくれるだけだ。もちろんそんな普通の睡眠薬で眠れるはずがなく、頭はいよいよ勝手に意地悪い呟きを囁き続けるだけである。

あとになって入院、手術後に、こんな程度のことではない神経的異常を体験することになるのだが、この最初の閉所恐怖の夜に、私はひたすら全身に脂汗を流し続けた。午前一時、午前二時。時間はわざとのように遅々としか進まない。寝返りを打てない背中と腰の筋肉が鋭く突っ張ってくる。いきなり大声を上げたい程の狂おしい状態だ。ところが同じ部屋の他の患者たちは、大きくいびきをかき、大きく放屁し、あるいは大声で寝言を言いながら、正常に眠っている。しかもすぐ隣の患者はほとんどひっきりなしに、楽し気な声で寝言を繰り返している。

朝まで一睡もできなかった。夜が明けてから、看護婦がもういいでしょうと、脚の上の砂袋を取りのけてくれて身体を動かすことができるようになって、意識は幾分正常に戻ったけれども、この大部屋での身動きならぬ眠れぬ一夜は、私の心身にかなりのストレスとなったようだ。

昼過ぎ、医師のところへ呼ばれる。

大判の現像フィルムが、照明のついたすりガラス板に留めてある。なかなか良く撮れた、細かいところまで——と医師は満足そうに言った。

確かに毛細血管が密に絡み合った部分まで造影剤がよく流れこんでいて、増殖変形した患部のおぞましい形が立体的によくわかる。だがこの写真を撮るために、こんなに苦しい思いをしたのか、と思うと、率直に言っていない気分ではなかった。

「悪いですか」と恐る恐る尋ねる。

「明白に腫瘍だ」

口数の多くない医師はきっぱりと言った。

「摘出ですか」

「切る。早い方がいい」